

鼻の奥の空洞（副鼻腔）に炎症が起き、鼻水、鼻詰まり、嗅覚障害、顔面痛など不快な症状をもたらす副鼻腔炎。患者数の多い一般的な病気だが、最近では従来の治療法が効きにくい新型の「好酸球性副鼻腔炎」が増えつつある。重度の嗅覚障害が特徴で、生活の質（QOL）を下げるおそれがある。獨協医科大学耳鼻咽喉科の中山次久医師に最新事情を解説してもらった。8月7日は「鼻の日」。

8月7日は「鼻の日」

「鼻の目」

衛生的になりすぎた環境も一因のようだ。好中球性は投薬などで治癒しやすいこともあり、相対的に好酸球性が増えているという。

好酸球性の特徴は嗅覚が鈍る。患者自身は「もしかしたら」と判断する一つのポイントになりそう。

ぜんそく患者に発症が多いのも特徴。鼻と気管は気道が同じため「特に成人後に発症する。好酸球性の膿液はよく出る。」と述べている。

視鏡で行い、時間は2〜3時間程度。2日後に止血用ガーゼを抜く処置が患者の大きな負担だったが、最近は溶ける綿も開発され、苦痛はぐっと軽減されている。

増える新型副鼻腔炎

重度の嗅覚障害が特徴

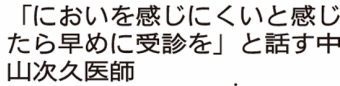
ていないが、中山医師は「都市化された地域で患者が多い」と指摘。好酸球性の方が障害が医師は注意を促す。嗅覚障害は起きるが、リスクが高い」と中山は、**洞化によって鼻洗浄が**ガムのように粘性が強い症したぜんそく患者は、**覚障害。好中球性でも**中山医師は注意を促す。

ガムのように粘性が強く吸引しにくい、単洞化によって鼻洗浄がうまくいくようになる。呼び掛けている。

治療

好中球性にはマクロ手術は鼻の穴から内

（おぎわらえみこ）
荻原恵美子



特 徴

従来の副鼻腔炎は、細菌感染をきっかけに「好中球」という白血球が鼻に集まって発症する好中球性。それに